

信州青木村 お蚕様プロジェクト



「お蚕さん、大好き！」

青木村児童センター所長 高田玲子

学校が終わり、子どもたちが児童センターに帰ってきました。
まず玄関にいるお蚕さんに挨拶です。

「お蚕さん、ただいまー！」

「昨日より大きくなって。毎日どんどん大きくなるね。」

「皮があるよ。ここにも…こっちにもある。脱皮したんだ。」

「あ、うんちが出てきた。お蚕さんのうんちはチョコチップみた



いだな。」

「お蚕さんの顔は新幹線にそっくりだ。」

お蚕さんを囲みながら、子どもたちのお蚕さん話がはずみます。お蚕さんを手に乗せたり、頭に乗せたり、頬ずりをしたり…毎日愛情いっぱいにお世話をしました。

おばあちゃんがお孫さんのお迎えにやってきて、お蚕さんに気付き声をあげました。

「えーっ、もしかしてお蚕さん？うわぁー懐かしい。何年ぶりかな

あ、50年ぶりだわ。おばあちゃんが子どもの頃は、どの家でも蚕さんを飼っていたよ。朝は畑で桑を採ってお蚕さんにあげてから学校へいったもんだ。おばあちゃんはお蚕さんのお金で学校に出してもらった…。」

お蚕さんを一緒にのぞき込むお孫さんに、おばあちゃんは懐かしそうに自分が子どもだった頃の話をしていました。



信州青木村お蚕様プロジェクトは信州昆虫資料館が村営になったことを機に、養蚕が盛んだった当時の体験をされた方々のお話を聞き、実際に蚕を飼ってみようということで平成28年6月に始まりました。信州大学繊維学部の森川英明先生、金勝

廉介先生のご指導をいただきながら、信州昆虫資料館、ラポートあおき、青木村児童センターで実施されることになりました。児童センターでは信州大学からいただいた約 150 匹のお蚕さんを、子どもたちとセンター職員でお世話をする生活がこの時から始まりました。

なかには虫が苦手な子どもがいましたが、みんないつの間にかお蚕さんが大好きになっていました。お蚕さんが食べる桑を準備するために村の中をまわっていると、毎日何気なく通り過ぎている道路のわきに、桑の木がたくさんあることに初めて気づきました。私たちが採ってきた桑の葉を一生懸命に食べるお蚕さんの姿を、時間が経つのも忘れて眺めました。お蚕さんとの初めての生活は、何もかもが驚きと感動の連続でした。

6月から飼いはじめたお蚕さんは7月には繭を作り始めました。子どもたちと一緒にトイレトペーパーの芯を輪切りにして貼り合わせ、手作りの『まぶし』（お蚕さんが繭を作る足場）を作りました。まだ薄い繭に懐中電灯の光を当ててみると、繭の中で一生懸命糸をかけているお蚕さんが見え、けなげな姿に感動しました。夏休み前にはみんな無事に真っ白いきれいな繭になりました。また、以前養蚕をしていた方から、実際に使っていた『回転まぶし』『くれ台』『蚕箔』『ひきぼん』などを寄贈していただきました。児童センターでのこの体験がきっかけで「お蚕さんを自分の手で育ててみたい」と夏休みの自由研究に選び、お家の方と一緒にお蚕さんを育てた子どももいました。

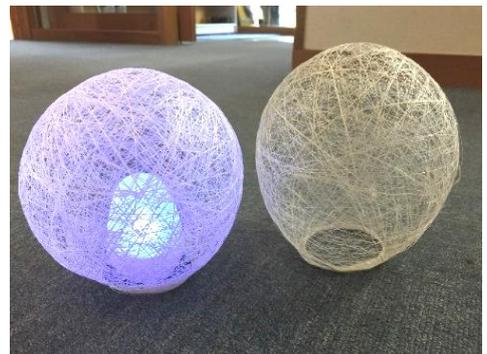


平成 28 年度の夏休みには信州昆虫資料館で、座繰り機による糸引き体験が行われました。児童



センターの繭も昆虫資料館の繭と一緒に座繰り機にかけられました。子どもたちはバスに乗って昆虫資料館へ行き、座繰り機のハンドルを交代で回して自分たちがお世話をした繭から絹糸を取り出しました。規則正しく巻き取られ上品なつやを持つ糸は、お蚕さんが懸命に糸をはいていた姿と重なり、とても尊く感じられました。

平成 29 年度は新しく信州大学からいただいた蚕と、昨年度児童センターで採取した卵から生まれた蚕を育て、約 2700 個の繭ができました。たくさんできた繭で、『絹の行灯作り』に挑戦しました。『絹の行灯』は金勝廉介先生が、子どもたち一人ひとりが自分の手で作れるよう、試行錯誤を繰り返して考えてくださったものです。行灯は茹でた繭から糸を取り出して 40 本ほど束ね、膨らました風船に巻きつけて作ります。一つ作るのに 1 時間程かかりますが、子どもたちは黙々と製作に励みました。よく乾燥させたあと風船の空気を抜いて、中に LED エッグライトを入れた行灯は美しく七色に光り始めました。愛情をこめて育てたお



蚕さんの繭から、世界にたった一つだけの行灯が出来上がりました。きっと子どもたちのそばで、優しい灯りをともし続けることと思います。

現在、化学繊維に囲まれた生活をしている私たちですが、絹糸はお蚕さんの命が吹き込まれ、人々の汗と努力のたまもので紡がれた尊いものです。今では役目を終えた養蚕の道具を見るにつけ、自分たちで育てた蚕の繭から糸を引き出す体験をしてみて、青木村をはじめ養蚕に取り組んできたこの地区の人々や歴史に、思いを馳せることができたような気がしました。そして何よりもお蚕さんはとてもかわいく心が癒され、大人はもちろん子どもたちの心の安定にもつながったと思います。

信州青木村お蚕様プロジェクトに参加し、このような機会をいただいたことに感謝しています。これからも子どもたちとお蚕さんに親しんでいきます。



命の尊さを学ぶ

保護者 佐藤恵利子



「シルク100%」は、とても高価ですが、小さな1匹の蚕の口から1本1本命をかけて作られていく瞬間を見ていると、人間の為に生き絶えていく姿から命の尊さを教えてもらいました。

今年の夏、4年生の4家庭がセンターから蚕の卵を頂き、繭玉になるまで育てるチャンスを頂きました。昔と違い、どこにでもありそうな桑の葉ですが、定期的にとり続けて毎日与えてあげる事は思ったより大変でした。蚕の成長過程により、桑の葉の与え方もみじん切りにしてあげたり、枝の先の柔らかそうな黄緑の葉を採って来たり、大きくなるにつれ、与えても与えてもすぐ食べ終えてしまったりと、人間の子育てをしているように感じました。

育てる前は、青虫など、とても手に触れないと思っていましたが、小さな卵のミリ単位の黒い赤ちゃんが桑の葉だけで真っ白いきれいな蚕に成長していく様子を見ながら、箱の中の清掃をしたり、手で触ってお世話をしたりしていると、手がすべすべになるのを実感出来ました。

車で走っている時に、美味しそうな桑の葉を見つけると場所を確認して、蚕の為に一生懸命になっていました。昔の養蚕農家の方々は、お仕事としてこの作業をされていたかと思うと頭が下がります。子どもだけでは、お世話するのはきっと難しい作業ですが、センターから蚕の話を聞いたとき子どもが「育ててみたい!!」と言ってくれたお陰で我が家の場合は、卵を50個頂きました。それが繭玉になり、沢山のカップルが誕生し再び卵を産み、孫にあたる蚕が227個の繭玉になりました。最初の繭玉はシルクを採るために犠牲にすることは、とてもかわいそうで出来ませんでした。2回目の繭玉は桑の葉の提供も困難になってきたので、きれいに作ってくれた繭玉からシルクを取り出し、我が家の宝物



にして残しておきたいと思いました。蚕の頭をちょっとだけ触ると一瞬だけ「イケメン」になりますが、その後すぐに元に戻ってしまうことも面白い発見でした。生き物を育てることの大変さを子どもに学ばせようと始めたのですが、振り返ってみると親である私が忘れていた大切なことを改めて気づかせてもらえたように思います。

はつらつ先生 IN あおき

今回は、青木中学校1年A組副担任 **小林 画** 先生です。



・好きな食べ物…お寿司が大好きで、毎日食べても飽きません。特に光物の鰯、鯖、秋刀魚が好きです。回転寿司に行くと30皿は食べます。最近食べたなかでは、ハマチにゆずがのっているのが美味しかったです。祖母が

料亭をやっていて小さい頃から美味しい物を食べていました。

自分で料理をするのも好きになり、今ではマイ中華鍋を持っています。



- ・苦手な食べ物…酒粕、白子。給食で出された物は全部食べます。
- ・趣味…ツーリング。バイクを持っていて中学の友人と行きます。最近行った場所で良かったところは渋川温泉です。モツ煮で有名な永井食堂に寄ってきました。

- ・どんな子どもでしたか？…小学生の頃は学校の休み時間にサッカーをして、土日にはスポ少で野球をしていました。弟とよくけんかをして母親にげんこつをもらっていました。



・先生にならなかったら？…小さい頃はテレビの「名探偵コナン」を観て探偵になりたかったです。中、高の時はプロ野球選手に憧れていました。印象に残っている先生は高校の野球部の外部コーチです。車も好きなので先生にならなかったら整備士になっていたと思います。



- ・好きな有名人は？…TOKIO です。「鉄腕ダッシュ」は欠かさず観ます。何も無いところからの物づくりが楽しいです。宇多田ヒカルや浜崎あゆみも好きで車で聴いています。
- ・お休みの日は何をしていますか？…基本部活をしています。実家ではりんごやなし、ぶどうなどの果樹や野菜を作っているの、その手伝いをします。



◀ へんしゅうこうき

青木村では昔から養蚕が盛んでしたので、蚕に詳しい方が身近にいらっしゃると思います。来年の夏、蚕を飼ってみたいと興味を持たれた方は、是非挑戦してみてください。青木村だからこそ出来ることの一つかもしれませんね。